



# この人を たずねて

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

## 速水敏彦氏

インタビュー  
久保賢太



### Profile — はやみず としひこ

1947年、愛知県生まれ。1970年、名古屋大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。大阪教育大学助教授、名古屋大学助教授・教授、名古屋大学教育学部附属中・高等学校長、名古屋大学大学院教育発達科学研究科長などを歴任。東海心理学会会長。専門は教育心理学。主な著書は、『自己形成の心理』（単著、金子書房）、『動機づけの発達心理学』（編著、有斐閣）など。

### ■ 速水先生へのインタビュー

— 先生が心理学を学ばれたきっかけをお聞かせください。

高校の頃は学校の先生か、出版社の人間になろうかなという漠然とした感覚で、教育学部に入りました。そこで当時助手だった辻敬一郎先生から教わった、ミュラーリアー錯視などの基礎的な実験がけっこう楽しかったのを覚えています。さらに、自分が作成したレポートに対して、先生から非常に丁寧なコメントが返ってくるのもうれしかったですね。今その大変さが理解できましたが。さらに、続有恒先生から調査法の実習を受け、グループで質問紙をつくって実施して、自分たちで集めたデータを処理し解釈するのがおもしろかったというのもきっかけですね。実は心理学が楽しくてのめりこんでいると、希望した科目の教職の単位が取れなくなってしまっ。さらに教師になろうという関心も薄れてきて、大学院に上がるしかない決めました。

— 現在の研究テーマや、興味の

あること、さらに今後の展望などについて教えてください。

私の研究分野は動機づけ、いわゆる「やる気」に注目してきました。その中でも、ワイナー（Weiner, B.）の原因帰属的な動機づけ理論や達成目標などの認知論的立場から動機づけを研究してきました。ただ研究を続けていくと、どうも認知ということに傾倒しすぎているのかなあ、という疑問が生じてきました。成功や失敗した後にその原因を尋ねて、無理やりつじつまを合わせているかのような気がしてしまうのです。動機づけというものは、冷静な認知というよりも、むしろ無意識的な感情のようなものが強くはたらいているのではないかと考えるようになりました。

そうした証拠を持っているわけではないのですが、NHKで放送されていた『プロジェクトX』などを観ていると、困難な状況下でのネガティブな感情がもともとなっていて、大きな仕事をやり遂げたということが頻繁にみられます。現在そうした不快情動にもとづく動機

づけなど、感情の側面から動機づけを考えた本を、定年の卒業論文として書いています。

— 強い動機づけを伴う感情といえば「怒り」ですが、それ以外の不快情動も動機づけとなるのでしょうか？

はい。怒りだけではなく、自分が不満な状況におかれた時に生じる感情や情動が、動機づけになるのではないかと考えています。結局は動因低減説のような考え方になってしまっていますが、動因としての感情が人を動かすのではないかと今は考えています。

ただ、そうした不満な状況を打破するぞという強い動機づけだけではなく、もっと日常的な比較的弱いやる気（炊事、洗濯、掃除などの家の仕事）についても興味があります。加藤登紀子さんは「家事はプラスマイナスゼロの仕事」とおっしゃっていました。たしかにせっかく食事をしてもすぐお腹は減るし、掃除をしてもすぐに汚れてしまう。しかし、そうした家事を行うための動機づけについて、誰も気にしていません。習慣や世話などに必要な動機づけは、育児や介護につながるもので、非常に大切です。

仮説ですが、私自身はこのやる気には、非常にポジティブな情動が関連しているのではないかと考えています。日常におけるポジティブな情動は、良好な人間関係が築かれているときに生じると思われる。人間関係が良好な場合、家事や育児、介護は自然にやっていけると考えられます。関係が良好ではない場合、なんで世話をしてあげなくてはいけないのか、と考えてしまうのではないのでしょうか。そう考えると、ポジティブな情動は、習慣的なことを可能にする動機づけとしてはたらいているのではないかと考えています。

— 先生がご提唱なされました仮

想的有能感は、学術的意義だけではなく社会的意義も非常に高い研究です。社会に大きなインパクトを与える報告したとき、研究者には何か起こるのでしょくか？

うーん、そんなに大したことは起こっていません（笑）。たしかに新聞やラジオ、女性週刊誌まで取材に来ましたね。そもそも私は、専門の人以外の一般人向けに何か書きたいとずっと思っていました。これまで研究者として論文を書いてきましたが、一体どれくらいの人を読むのだろうかと思ったのです。せいぜい何十人かなと。それで何か一般の、大勢の人に読んでもらえるようなものを書きたいと思ったのです。『他人を見下す若者たち』（講談社現代新書、2006）に対しては、多くの人が若者叩きの本だと勘違いされるようです。でも、あの本で本当に言いたかったのは、若者だけではなく社会全体への警鐘なのです。ただ正直に言うと、私も中年の人に売れると思っていました。しかし、本屋さんによると、若い人が多く買ってくれたようです。若い人には私の言いたいことは伝わったのではないかなと思います。

——最後に、心理学を学ぶ学生や大学院生に、やる気が出るメッセージをいただけますか？

動機づけの研究者はよくそれを言われるのですが、難しいです。大学院生の博士課程は、研究者の通行手形として博士号をとることができますが、それだけでは就職はありません。学位取得だけではなく、それ以上の仕事ができるよう心掛けてほしいです。

### ■インタビュー者の自己紹介

やる気の専門家にインタビューして

やる気という言葉には、非常にポジティブな印象を感じます。し

かしながら、強いやる気は、不満のある状況を打破しようとするネガティブな情動をもとにしているのではないかという速水先生のお話は、私の短い研究生活を振り返っても同意するところが多々あります。私自身、研究者として生きていこうと考えるようになったのは非常に遅く、なんと博士号取得後です。おそらく遅すぎの部類です。それまでは、漠然と犯罪心理学って格好良いのではないかな、という浅はかな動機づけで研究していました。しかし、幸運なことに私を育ててくださった先生方により、そんな浅はかな考えを打ち砕いていただき、困難かつ有意義な状況を与えていただきました。そうした状況を打破しようとする気を出せたのではないかと今になって思います。速水先生の仮説を裏づける体験をしたような気がします。先生方、感謝しております。

### 仕事としての研究

現在、私が所属しておりますERATO 岡ノ谷情動情報プロジェクトでは、情動に関するさまざまな新発見がなされています。私もその末席として、これまでの専門である生理反応を用いた犯罪捜査の技術を活かし、コミュニケーション時における怒りの生起と、怒りに伴う生理反応パターン、さらにはそうした怒りの抑制に関して研究させていただいております。そうした社会・認知・生理入り混じった、とにかく枠を取っ払った研究をさせていただくことで、本

当にいろいろな経験を積ませていただいております。

私も社会人になり2年目、学生のときにやってきた研究と、現在の仕事としての研究の違いを個人的に感じるがあります。たとえば、研究は自分一人で行っているわけではないということです。自分の周囲にも、上司の先生、同僚である研究スタッフ、事務を担当してくださる本部事務方の皆様、さらには実験参加者の皆様、機材の納入業者様といった多数の方々とのつながりがあります。そして、研究の出資者である一般社会とも無関係ではありません。大勢の方々との関係を結ぶには、コミュニケーション能力はもちろん、研究全体をコーディネートする能力、研究の売りを伝えるプレゼンテーション能力が、仕事としての研究をしていくうえで必要です。良好な人間関係が研究のやる気を生むというのは、またもや速水先生のポジティブな情動が動機づけとなるという仮説を支持する証拠だと感じます。

とはいえ、行く先が見えないポストの身です。夜眠れないことは少なくありません。ゴールはまだ見えませんが、今回速水先生から、成功体験を積むことや人に役立つことで自尊型の有能感（仮想的有能感のうち、理想的とされる型）を持てると励ましていただきました。小さな成功体験や他者への貢献をめざして、頑張りたいと思います。



### Profile — くぼ けんた

2009年、広島大学大学院修了（博士）。同年、名古屋大学大学院研究員。2010年より、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業・岡ノ谷情動情報プロジェクト研究補助員。専門は認知心理学、生理心理学、犯罪捜査心理学。現在は、コミュニケーション場面における怒りと抑制を、生理反応と質問紙を用いて検討するなどの社会生理心理学的研究に従事。